

勝海舟 坂本龍馬との出会い

週間ポスト
2013年7月5日号
P183



「勝海舟邸跡の記」より

⑨ 福岡藩黒田家中屋敷跡。 ⑥は溜池跡
若かりし頃の勝海舟は、黒田家のお抱え学者永井青崖から蘭学を学んだ。

② 勝海舟邸跡 ③ 氷川神社

本所に生まれた勝は1846(弘化3)年赤坂に移り以降、その地を愛し3箇所に住んだ。氷川神社のすぐそばに住んだのは、幕末の動乱期に当たる1859(安政6)年から1868(明治元)年の10年間。

38歳の1月13日、咸臨丸でアメリカに出航、5月5日に浦賀に戻っている。1862年(文久2)年7月4日、軍艦操練所頭取となった(軍艦奉行並み)。

1862(文久2)年には脱藩中の坂本龍馬が訪ねてき、勝の言葉「海の外にでていかないと、これからの日本の進む道はない」に感銘し、その場で勝に弟子入りをした。この地、赤坂で日本の歴史が大きく動いた。その後、龍馬は勝の紹介で西郷隆盛にあう。そして龍馬の奔走によって薩長同盟が結成され、明治維新へと繋がる。

港区赤坂六丁目十番三十九号の「ソフトタウン赤坂」が建つこの地は、幕末から明治にかけて、幕臣として活躍した勝海舟が安政六年(1859)から明治元年(1868)まで住んだ旧跡である。

海舟は終生赤坂の地を愛し、三カ所に住んだが、当初居住中の十年間が最も華々しく活躍した時期に当たる。海舟は号で名は義邦。通称麟太郎、安房守であったから安房と称し、後に安房と改めた。夫人は民子。

海舟は文政六年(1823)、本所亀沢町の旗本屋敷＝現墨田区両国四丁目の両国公園の地＝で、貧しい御家人の子として出生。

長じて赤坂溜池の筑前黒田藩邸＝のちの福吉町、現赤坂二丁目の赤坂ツインタワービルや衆議院赤坂議員宿舎などの地＝に通って蘭学を学び、その縁から新婚二十三歳で赤坂田町中通り＝現赤坂三丁目十三番二号のみすじ通り＝の借家で所帯を持った。

三十六歳からは赤坂本氷川坂下＝もとひかわざかした、のちの氷川町＝のこの地に住んだ。明治元年四十五歳で、引退の徳川慶喜に従って、ここから静岡市に移ったが、明治五年(1872)再び上京し、満七十六歳で亡くなるまで赤坂区氷川町四番地＝現赤坂六丁目六番十四号＝に住み、参議・海軍卿、枢密顧問官、伯爵として顯官の生活を送り、傍ら氷川清話などを遺した。

この時の屋敷跡は東京市に寄付され、平成五年(1993)春まで区立氷川小学校敷地として使われた。当初に住み始めた翌年の安政七年(1860)、幕府海軍の軍艦頭取＝咸臨丸艦長として上司の軍艦奉行木村撰津守、その従僕福沢諭吉らを乗せ、正使のの外国奉行新見豊前守を乗せた米艦ポーハタン号に先行して渡航、日本の艦船として初めて太平洋横断・往復に成功した。

文久二年(1862)十一月、海舟を刺殺しようとして訪れた旧土佐藩士坂本龍馬らに世界情勢を説いて決意を変えさせ、逆に熱心な門下生に育てて、明治維新への流れに重要な転機を与えることになったのもこの場所である。

明治元年三月には、高輪の薩摩藩邸＝品川駅前の、のちの高輪南町、現港区高輪三丁目のホテルパンフィックの地＝で行われた。第二回については芝田町薩摩藩邸＝のち三田四国町、現港区芝五丁目芝税務署辺りの地＝または、三田海岸の薩摩藩蔵屋敷(くらやしき＝倉庫)の裏側にある民家＝現港区芝五丁目の三菱自動車ビル周辺＝まで行われたとの両説がある。いずれも当所居住中のことである。

明治維新では、明治元年五月、海舟の留守中に、一部の官軍兵士がこの勝邸に乱入したが、海舟の妹で佐久間象山未亡人の瑞恵(旧名・順)が家人を励まして一步も引かずに対応し、危急を救った。

海舟は終生赤坂の地を愛したが、郊外の風光にも惹かれ、初めは葛飾区東四ツ木一丁目に、次いで洗足池に面して造られ、自ら建てた西郷隆盛を偲ぶ碑と共に大田区文化財に指定されている。

平成七年十一月吉日

ソフトタウン赤坂管理自治会

撰文 伊波 新之介

協賛 勝海舟顕彰会

協力 港区郷土資料館

坂本龍馬は開明派の大名で有名な越前福井藩主・松平春嶽の紹介状を持ってきた。

当時の世相で、脱藩者は犯罪者だった。

勝は当時、幕府の最高責任者の一人となっていて、脱藩者の27歳の坂本が40歳の勝にあうのは異例中の異例であった。

勝が書き残した日記によると、龍馬は場合によっては勝を切るつもりであったようだ。

